静岡・土橋（つちはし）遺跡

1　所在地　静岡県袋井市土橋字歳別当

2　調査期間　一九八二年（昭57）四月～一九八五年三月

3　発掘機関　袋井市教育委員会

4　調査担当者　寺田義昭・永井義博・山本宏司

5　遺跡の種類　集落跡

6　遺跡の年代　弥生時代～江戸時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

土橋遺跡は、静岡県の西部、磐田原台地の東縁を流れて遠州灘へ注ぐ太田川の左岸に位置する集落跡である。年代的には、弥生時代後期～古墳時代初頭を中心とする遺跡ではあるが、奈良・平安時代の遺構・遺物も多く、「国厨」「里人」「上人」などの墨書土器も出土している。

ここで紹介する木簡は、江戸時代中期の宝永・正徳の年号を記すものを含み、

（磐　田）

第八調査区の溝跡SD一〇五とSD一二八の分岐点付近の杭列の間より合計一五点出土した。土橋遺跡の溝跡は地形的な制約のためか、弥生時代に始まって各時代の溝跡が重複、または隣接しており、本遺構も古墳時代初頭の溝跡に重複して検出された。

8　木簡の釈文・内容

出土木簡の特徴は次の四点である。

一、(3)の「宝永七年」（一七一〇）と、(4)の「正徳四年」（一七一四）は、共に江戸時代中期の年号である。二、文字資料の製作者・使用者と出土地との関係が明らかである。三、内容は、観音経の一節で、「鳥具一切功徳……」と経文の後半部分から始まっている。四、江時代中期の民俗事例としては、全国的にも数少ない例であろう。

木簡は一括出土であり、比較的多量の情報を提供してくれるのであるが、その性格については不明の点が多い。そこで、類似する民俗事例について考えてみると雨乞いがある。一般的には、雨乞いは馬や牛の首を切って池や沼に沈めたりしたが、ここでは写経によって雨を得ようとしたものであろう。溝の堰に立てられていたことを考えると興味深い例である。他には、川施餓鬼あるいは流灌頂の例も考えておく必要がある。これは難産で母と子が一緒に死んだ場合に限って小川の中や、道端に卒塔婆を立てたとのことである。もう一つは、可能性は少ないが、たんに溝の土止めの杭の補強材として使われた場合である。

(1) ▲二篇具一切功徳慈眼視衆生福聚海無量是故應頂礼夫以相当今月斯日伏値本窓体然禅定門百ヶ忌辰大□〔仏カ〕頂万行首楞厳□ (1007)×23

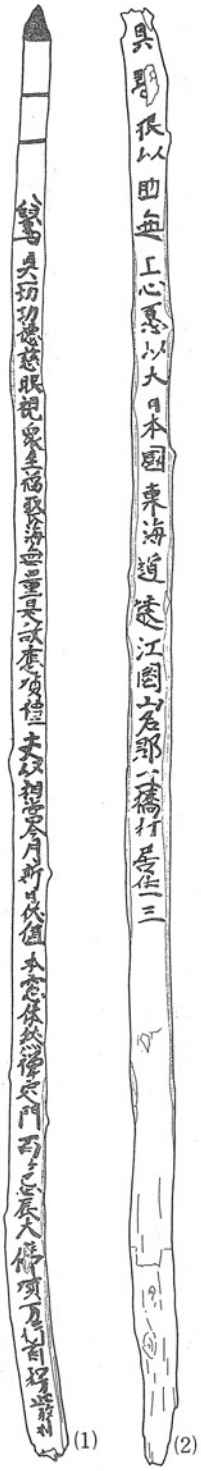
(2) 具□恨以助無上心憂以大日本国東海道遠江国山名郡土橋村居住三 (1018)×32

(3) □至究竟彼岸者也施主敬白宝永七年寅正月廿九日 (500)×36

(4) □□□□□□□究竟彼岸者也正□〔徳カ〕四年亥□月十一日□□□□〔孫子敬白カ〕 (509)×28

文字の解読には、浜松市立博物館の赤外線テレビを使用し、実測図作成にはニシオグラフを使用した。一五点の資料は、現在、㈶元興寺文化財研究所で保存処理中である。

9 関係文献

袋井市教育委員会『土橋遺跡―基礎資料編』（一九八五年）

（永井義博）